

国土交通大臣賞

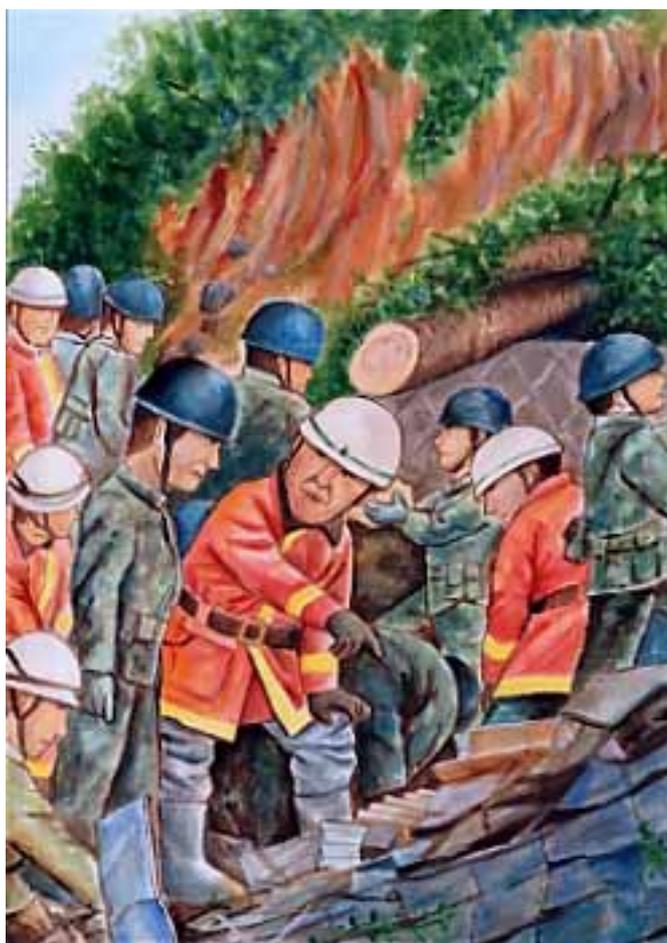
(絵画の部 小学生)



高知県 高知市立昭和小学校6年
前田 理沙

国土交通大臣賞

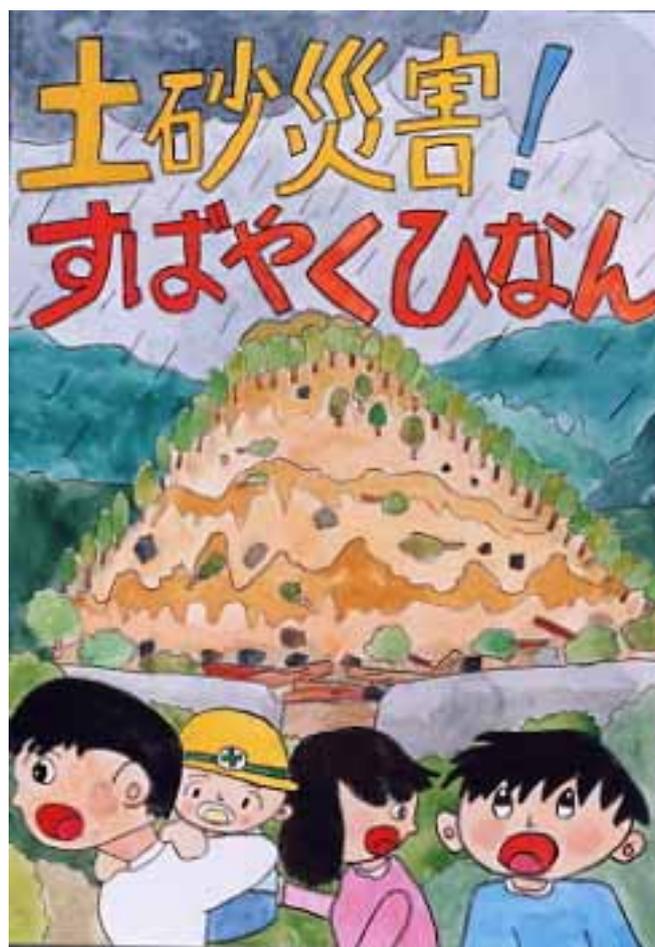
(絵画の部 中学生)



神奈川県 小田原市立城山中学校3年
鈴木 亜里沙

国土交通大臣賞

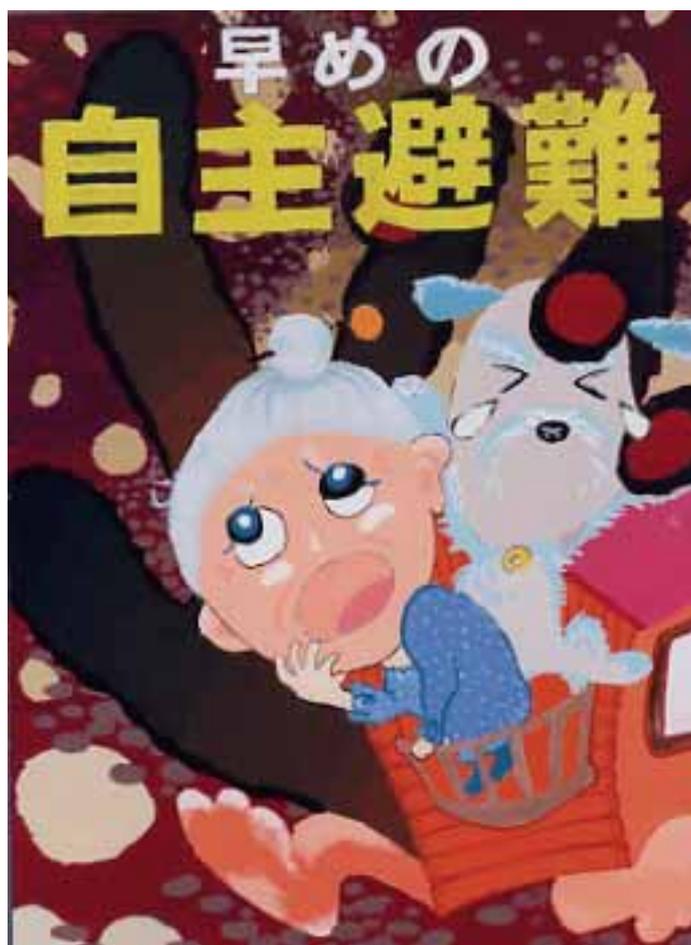
(ポスターの部 小学生)



岐阜県 垂井町立垂井小学校3年
長澤 由貴子

国土交通大臣賞

(ポスターの部 中学生)



新潟県 十日町市立水沢中学校3年
津畑 沙織理

国土交通大臣賞 (作文の部 小学生)

題名 「湊が元気になるために私がんばること」
長野県 岡谷市立湊小学校 4年 中島 夏恋

私たちの住んでいる湊は、7月に土石流災害をうけて、7人も亡くなってしまいました。

学校に行けるようになってから、災害にあった場所を見に行きました。高速道路のコンクリートに土砂がすごくかかっている、こわれた家がたくさんありました。花岡の船魂神社の木が守ってくれた家もありました。

湊小学校や南部中学校もひなん所になって、たくさんの方がひなんしたそうです。

災害は人の命をうばう事があってとってもこわいです。

このままじゃまた災害が起きて、人が亡くなってしまいます。けど、長野県の人たちが湊のために小田井沢の方などに砂防えん堤を作ってくれます。また災害が起きたら、砂防えん堤が少しでも役立つといいです。災害が起きた時はみんな元気がなかったけど、家の中に入ったドロや水を出したり、物を運んだりしてがんばっていました。船魂神社のたおれた木やきずついた木に薬をぬったり包帯をまいたりしてくれました。

私は、ひがいがあった人や、地域の人に元気よく挨拶をして、元気になってもらいたいです。学校に行く時や帰る時に外に立って挨拶をしてくれる人がいるのでしっかり笑顔で挨拶をしたいです。

地域の方のすごいと思う所は、この災害で亡くなってしまった人や家をなくしてしまった人がいて悲しいけど私たちに笑顔で挨拶してくれる所です。

湊小学校は全校で、9月28日にお守りペンダント作りをしました。災害にあった地域の人や家族の人にあげる事にしました。うらに言葉を書いて作りしました。元気が出るようにがんばって作ったので、大切に使ってほしいです。

湊小学校は11月11日に音楽会があります。6年生はリコーダーをやって、私たち4年生は合奏で「アイアイ」と言う合奏の曲と、合唱で「おそすぎないうちに」と言う歌を歌います。キレイな声で歌う事や、最初から最後までできるようにがんばっています。おそすぎないうちには少し悲しいけど、アイアイは楽しい曲なので元気になってほしいです。地域のたくさんの方が来てくれるとうれしいです。

おそすぎないうちにで心をこめて歌いたい所は、『今あるすべての物は当

たり前なんかじゃなく、今あるすべての物がきせきてきにあるとしたら、きみはどうやってそれを守るだろう』と言う所と、『おそすぎないうちに、まに合う今のうちに、できるかぎりのことをしよう、生まれてこられたお礼に』です。

2番も同じような所です。

私の1番大切な物は、命、家族やおじいちゃん、おばあちゃんに買ってもらった物です。1番大切な人は、家族、おじいちゃんおばあちゃん、すべての人です。

今できる事、やらなきゃいけない事は、親に心配をかけたり、うそをつかない事と、命の勉強をしっかりやって、他の勉強も一生けん命やる事と、家族や友だちにやさしくしたり、お話をいっぱいする事です。

今できる事、本気でやっている事は、学校の行きと帰りに外に立っていたり散歩をしている人に大きい声で挨拶をする事です。

湊小の4年生は11月21日に長野に行って勉強をしてきます。県庁で防災センターの人の話を聞きます。話を聞く時に、話をしている人の方を見てしずかに聞きます。長野へ行く前に、災害の勉強や浅間山の噴火の勉強などを一生けん命やりたいです。浅間山の噴火は、どのくらいの大きさと、どのくらいの早さで流れてくるのかとかのわからない事をわかるようにしたいです。長野で他に行く所は、善光寺です。私は小さい時に一回善光寺に行っておかいだんめぐりでカギをさわりました。カギをさわると幸せになれると聞いて、がんばってさがしてさわりました。長野旅行で善光寺に行っておかいだんめぐりで幸せのカギをさわったら、地域の人や家族の人に少しでも幸せを分けて、自分も幸せになりたいです。

ひがいをうけた人に元気になってほしいです。

国土交通大臣賞
(作文の部 中学生)

題 名 「生きるということ」

長野県 岡谷市立岡谷南部中学校 2年 山岡 美菜

他人の死をととても悲しんだこと、それは多分、誰にでもあると思います。けれど、死という言葉が誰もが簡単に扱います。それは、自分の死がどれほど怖いか考えた人が少ないからだだと思います。

七月の土石流災害で私は死にかけました。はっきり言って生きていた方が奇跡でした。多分、たくさんの偶然が重なって、なんとか生きていたんだと思います。

その日の朝、四時頃起きていました。雷のような音が続いていたからです。それは、山から流れてきた岩が、道路の下の土管を転がり落ちてきていたのです。そのうち、その岩は下でつまって、水がふきあげました。濁った水が、かなりの高さにふきあがっていました。私はその頃、着替えて、一日分の着替えをバッグにつめ終わり、明かりをつけて新聞を読んでいました。ですが、そのうち、停電したのです。私は外に出ていた母に伝えました。

「お母さん、電気消えちゃったよ。」

それが最後の言葉でした。電柱がゆれ始め、電線が次々に切れて、頭上で火花を散らしたのです。いそいで玄関に入り、ドアを閉めた瞬間、すきまから見えたものは、家ほどの高さの土と木の塊でした。

瞬間の判断で、私は二階に駆け上がりました。そうしなければ私は肩までも泥につかって流されていたか、埋もれていたでしょう。私の家の一階は川と化していました。大木も何十本も突っ込んでいました。

下でメキメキと音がするし、電柱が倒れ、電線がショートし、爆発が起きました。その爆発で、二軒上の家が火事になったのです。

家にとり残された私は、一刻もはやく逃げたくて窓を開けました。土のにおいがすごかったです。救助をしに来てくれた方々が私をみつけてくれたので、私は裸足で屋根を歩いて脚立で下に降り、ひざまで泥につかって久保寺へと逃げました。お寺で父と母に再会しました。

今も思い出せるほど、あの時の恐怖はすごかったです。普段どんなに「死」という言葉を使っても、そう簡単に死ぬ覚悟は出来ません。それを、身をもって体験しました。「死ね」だの、「死ぬ」だの、みんなが日常で使うけれど、「死」はそう簡単に表せるものではないし、表してはいけないと思います。やっぱり、「死ぬ」と感じると、すごく怖いし、「死にたくない」と思います、それは、聞いただけでは分かるようなことではないと思

うけれど、そのことをたくさんの人に、きちんと考えてほしいのです。

この災害は、あらゆるものを奪っていきました。家も、財産も、日常も。けれど、こうやって命があるのだから、この命を無駄にはしたくありません。そう考えられるようになったからこそ、「死」ということを簡単に扱わず、命を大切にすること、私は伝えたいと思います。どんなに小さいことでも考えることがもしあったら、今から変えてほしいと思います。